

病棟スタッフによる余暇支援の取り組み

○ 草壁孝治 今井悦子（レクリエーションワーカー） 田邊真規（生活活性化員）
野村滋美（ケアワーカー） 恩田淳江 小池良江（看護師） 橋本千里（師長）〔青梅慶友病院〕

I. はじめに

A 老人病院では『豊かな最晩年をつくる』ことを目標に掲げ、病院を「生活の場」と捕らえ、治療を含む日常生活のケアはもちろんのこと、余暇生活においても、レクリエーション（以下レク）ワーカーやデイケアスタッフ、生活活性化員が、人生最期の余暇時間¹をその人らしく過ごせるよう支援している。

病棟では転倒防止の観点から、患者が日中安全に過ごせるよう病棟ホールにスタッフを配置し見守りを行っている。15 病棟あるうちの B 病棟では、病棟内の二箇所のホールで、それぞれ 1 名ずつの職員（ホール係）が見守りを行っている。ホール係の役割は、立ち上がり時の転倒防止、認知症患者の BPSD (behavioral psychological symptoms of dementia) への対応、トイレ誘導等である。穏やかに過ごしているときにはレクを行うが、急な立ち上がりやトイレに行きたい人がいれば、レクを一時中断して対応をする。

そこで、二箇所の離れたホールでの見守りを、声を出せば届く距離のホールで、一人がレクを行い、他の一人が BPSD やトイレ誘導に対応することで、レクを中断することなく集中して楽しめる環境が作れるのではないかと考えた。また、より質の高いレクをおこなうため、レクの考え方、方法などについては勉強会を行った。

病棟スタッフは単に見守りだけでなく、そこに余暇活動を取り入れ、余暇時間の充実と BPSD への対応を試みたので報告する。

II. 目的

病棟スタッフによる余暇支援への取り組みにより、入院患者の余暇支援時間の量、質共に向上させ、認知症患者の BPSD の軽減について明らかにすることである。

III. 方法

施設 A 老人病院 B 病棟 介護保険病床認知症疾患型 44 床

実施期間 21 年 8 月 19 日～

担当スタッフ B 病棟看護師、ケアワーカー 計 22 名

対象者 B 病棟患者 44 名のうちホールで過ごす人 平均 15 名

内容 月曜日から日曜日の午前 1 時間、午後 1 時間の余暇支援

余暇支援の考え方、方法については、レクワーカーによる勉強会 30 分間を 2 回開催する。勉強会の前後で、職員にアンケート調査（自由記述式）を行い、回答者の記述内容からキーワードを抽出して、類似した言葉をまとめた。

アンケート実施期間 1 回目平成 21 年 8 月 26 日、2 回目平成 21 年 10 月 3 日

1 回目のアンケート項目（レク勉強会前）

①ホールが近くになってのメリット。 ②デメリット。 ③どんな余暇支援を

提供するか。

2 回目のアンケート項目（レク勉強会后）

①勉強会に参加して。 ②患者の変化（余暇、日常も含め）。

アンケート対象者 A 老人病院の B 病棟の全職員 22 名。

師長 1 名、看護師 8 名、ケアワーカー 12 名、生活活性化員 1 名

IV. 結果

1 回目のアンケート結果 () 内は人数

1. ホールが近くになってのメリット。

- ・もう一人いることで安心でき、ゆったりした対応ができるようになった。(8)
- ・二人のうち一人が余暇支援に集中できる。(3)
- ・不穏な方への対応が可能になった。(1)
- ・他のスタッフの不穏な方への対応の仕方が分かった。(1)
- ・患者の新しい一面や能力を発見できた。(1)

2. デメリット

- ・安心感がある反面、緊張感が薄れる。(3)
- ・ホールがざわざわしているときがある。(2)
- ・無駄な動きがでてしまう、連携が必要。(2)
- ・責任の所在がはっきりしない。(2)

3. どんな余暇支援を提供するか。

- ・趣味、嗜好に合わせて、個別でできる雰囲気を作る。(4)
- ・午前手先を動かすなど覚醒できる活動、午後はゆったりと歌やビデオを観るなど。(3)
- ・その日、患者がやりたいこと、興味を持つことを探して提供する。(1)
- ・のんびりと穏やかであれば、患者を集中できるお話し会など。(1)

2 回目のアンケート結果

1. 勉強会に参加して。

- ・レクの進め方、手順が分かった。(5)
- ・高齢者とのコミュニケーションの取り方、傾聴について理解できた。(2)
- ・一人ひとりに合った余暇支援の大切さが分かった。(2)
- ・今までただ歌を歌うだけであったが、レクの進め方を教えてもらい、患者も良い反応をみせ、うれしく感じた。(1)

2. 患者の変化（余暇、日常も含め）

- ・自分の好きなことを見つけ集中し、落ち着かない人が減った。(3)
- ・トイレの回数が減り、傾向も分かった。(3)
- ・職員の声かけが増えることで、以前より笑顔が多くなってきた。(2)
- ・その日の患者の様子を伺いながら、その時にできる余暇支援を提供したい。(1)
- ・患者の新たな一面が次々と発見されている。スタッフが上手く引き出している。(1)

V. 考察

余暇支援は、以前はレクワーカー、生活活性化員が行っていたが、表1の通り週に7コマであったが、病棟スタッフに関わるようになり、表2の通り、週16コマと2.3倍の支援時間を持つことができ、時間数から見ても、余暇の機会が増えたことがいえる。

表1 レクワーカー、生活活性化員の週間予定表

	月	火	水	木	金	土	日
午前			(うた)	(趣味)		<書道>	
午後	<レジスタス>	(うた)		<レジスタス>		<映画>	

表2 レクワーカー、生活活性化員、病棟スタッフの週間予定表

	月	火	水	木	金	土	日
午前	余暇支援	余暇支援	(うた・余暇)	(趣味・余暇)	余暇支援	<書道・余暇>	余暇支援
午後	<レジスタス> 余暇支援	(うた・余暇)	余暇支援	<レジスタス> 余暇支援	余暇支援	<映画・余暇>	余暇支援

() レクワーカーによる支援 < > 生活活性化員による支援
 その他 病棟スタッフによる支援 (今回追加分)

1回目のアンケート結果では『ホールが近くになってのメリット』として「もう一人いることで安心」が8人の回答があり、スタッフの精神的ゆとりや安心感が伺える。

デメリットとしては、始めたばかりということもあり「ホールのざわざわ感」がある、また「職員の無駄な動きが多く、連携が必要」とスタッフ間のコミュニケーションの必要性も上げられている。

これらのアンケートの結果を踏まえ勉強会を行い、質疑応答のなかで「レク科にどのようなレク財があるのか」、「CDにあった歌集があるとよい」、「回想法などで話題を広げる知識がない」などの具体的な意見が出され、レク財の一覧を病棟スタッフがいつでも見られる場所におき、CDにあった歌集の作成、写真カードを作り、裏面に写真の解説文を載せ、話題を広げやすくした、そして、レクの経験がないスタッフでも、余暇支援が行いやすい環境を整えた。

約5週間経った2回目のアンケートの『勉強会に参加して』の結果からは、レクの進め方、コミュニケーションの取り方の理解を深め、そこから集団の運営がうまくでき、開始当初のざわざわ感もなくなったと感じている。「患者の新たな一面が次々と発見されている。スタッフが上手く引き出している」、「患者が楽しそうに過ごされる姿を見て、嬉しく感じた」など患者が新たな余暇活動を楽しまれる姿をみて、スタッフの意識向上そして支援の継続にも繋がっている。スタッフ間の連携の必要性から、事前打ち合わせを行うようになり、無駄な動きも改善され「今日は何をするのか」をお互いが理解することで役割分担もできてきた。

患者の変化としては2回目のアンケートから「自分の好きなことを見つけ集中し、落ち着かない人が減った」とあり、余暇活動に集中することから落ち着きのある生活に繋がったと考える。「トイレの回数が減った」の回答もある。訴えのある患者は頻尿感、残尿感があり、一度トイレに行くとそのあとは出ることはなく、本人にとっても辛い行為である。その人の好む活動を見つけることから、活動に集中し、残尿感を忘れことができ、穏やか

に過ごせるようになった。BPSD の患者への活動は、余暇歴やハードルの低い² プログラムから提供し、お話しができる人にはお話しの中から、興味関心を探り、スタッフ間でノートを付け、現在の能力を考慮し、活動内容や対応方法を検討している。

二箇所の離れたホールを近くのホールに移し、病棟スタッフが余暇支援に関わることで、多角的な評価をし、ノートを付けることで統一した接し方ができ、患者の新たな活動の発見や認知症患者の BPSD を軽減できた人もみられた。レクの進め方は勉強会により患者一人ひとりにあった余暇を発見し、職員は余暇支援の意識を高め、人生最期の余暇時間をその人らしく過ごす支援に繋がった。

症例

1.対象属性

90 歳女性。診断は認知症。要介護度 5、障害老人の日常生活自立度 B1、認知症老人の日常生活自立度 IV。

短期記憶と見当識において著しい低下が見られる。言語機能は比較的維持されており、一つひとつのやりとりはスムーズに行える。思考や判断力には若干の低下が見られ、抽象的な概念で物事を考えることが困難になっている。身体的には便秘傾向があり、2 日に 1 回の下剤と午後 3 時に精神安定剤を服用している。

2.結果

余暇歴は書道、読書、俳句とあり、今回の余暇の取り組みで、会話の中から、昔のあそび、学校時代に学んだことの中から百人一首の話題からヒントを与えるとスラスラと出てくることが分かった。

日中落ち着きがなくなることがあるが、深く接する中か、不穏になる前の傾向として、いらだち感が現れることがわかり、いらだちがみえ始めたときに、百人一首などを読む、書き写すなどの活動を提供することで、関心が活動に移り、落ち着かれることが分かった。このことから次第に落ち着いた日々を過ごすし、午後 3 時に服用していた精神安定剤を平成 21 年 10 月 2 日に中止するに至った。

患者の話には非現実的なことがあるが、話を一切否定することなく傾聴すること、また、職員がその日感じたこと、話した内容などをノートに付け、全職員で共通理解をし、同じ対応をしたことも安定に繋がった要因の一つと考える。

VI. 今後の課題

余暇時間は病院に入院している患者にも大切な時間であり、専門スタッフだけでは、支援時間に限界がある、今後も、病棟スタッフと協力し、より充実した人生最期の余暇時間を過ごせるよう探求していきたい。

参考文献

- 1) 草壁孝治・斎藤正彦編著者『高齢者のレクリエーションマニュアル』ワールドプランニング、2002 年 4 月 p26
- 2) 草壁孝治・佐近慎平・今井悦子『老人病院の入院初期における余暇支援のあり方』レジャー・レクリエーション研究第 61 号 2008 年 11 月 p76